

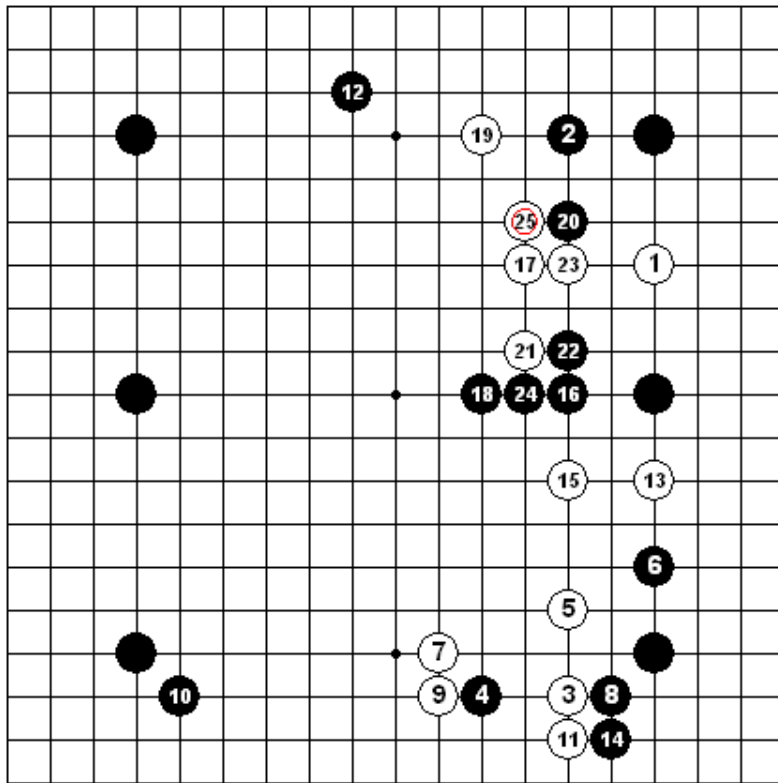
日豪親善碁会の記録より

六子 マーク・ベル三段

白 根橋輝一九段格

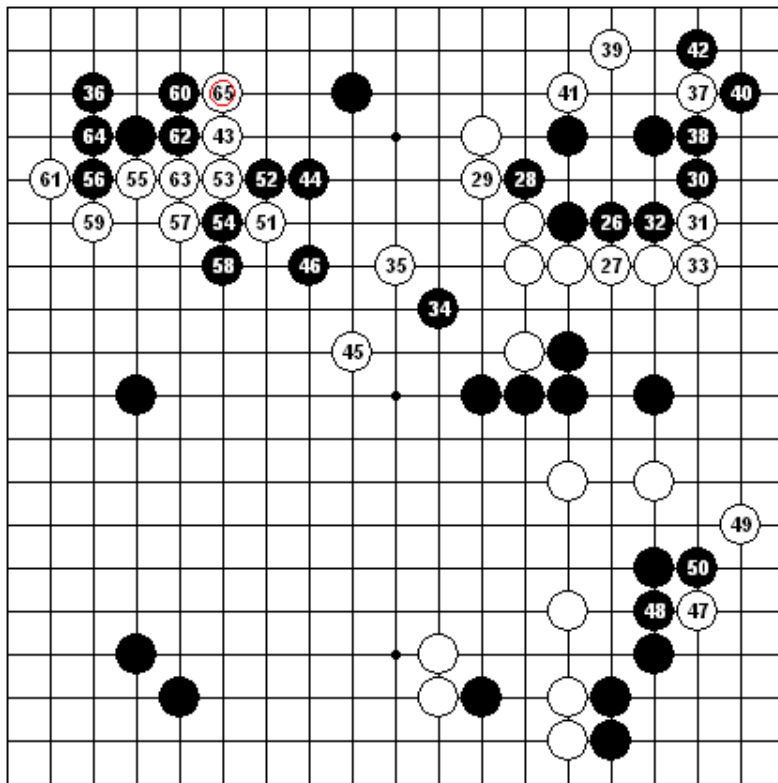
記録、観戦記 柴山雄二郎八段

文責 氣賀康夫

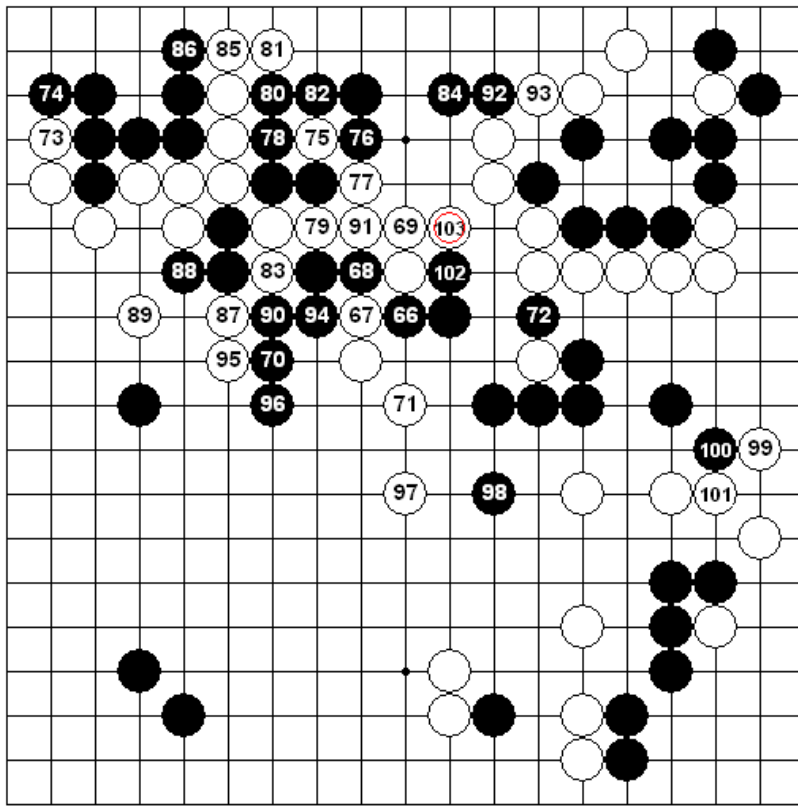


ブリズベン囲碁クラブを迎えての囲碁三田会との親善碁会は第十回を記念する素晴らしいイベントとなりました。その碁会の主将戦の第一局を鑑賞しましょう。棋譜と、観戦記は主将戦第二局を打った柴山八段が書きました。文責は氣賀です。なお、解説は対局者の根橋主将にも見ていただき、ご指摘のあった必要な注記は後で加筆しました。

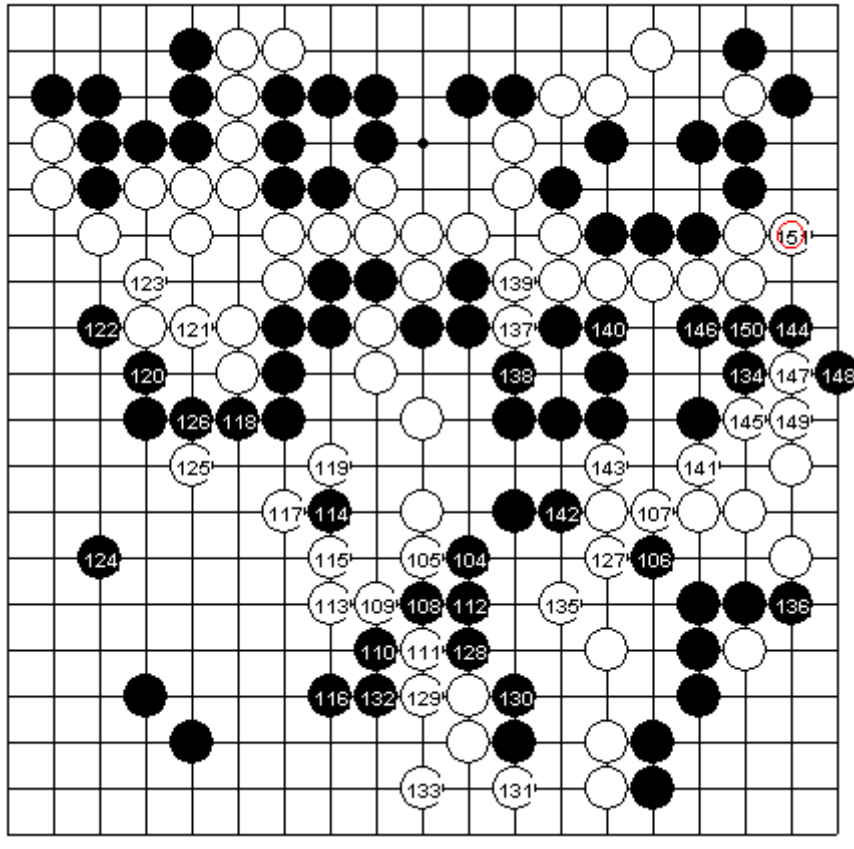
1. 黒（8）は（9）のところにハイ、普通の定石どおり打つ方がよい。
2. 黒（10）は石の姿が縮こまっている。打つならケイマであろう。それよりも右下が急務、黒（11）とハネ、白（3）の左ツキアタリの二手を交換すべきである。また全局的にみて左下を守るより、（1）の二路左にボウシするなど攻めを重視したい。
3. 黒（14）は戦線離脱であり、ここでは右辺の星の石から左に一間にトビ、上下の攻めを見合いにしたいところであった。
4. 白（19）と打ち込まれることになり、碁がまぎれてきた。
5. 黒（22）は悪手になっている。この手では単に（24）にツグのが正しい。
6. 白（25）は厚い本手である。



7. 黒の(26)から(32)までは、不要な内壁を塗り、相手の外壁を頑丈にしていると文責者は感じた。この4手を保留して単に(38)と打つ方がよかったと思った。
8. 黒(34)は白(35)という好手を誘っている。
9. 黒(36)コスミでは、左上星の石から右に一間に打ち、上辺の石との連携を重視したい。
10. 白(43)は絶好の一手である。
11. 黒(46)はいい手である。
12. 黒(52)からのデギリは白の調子を与えている。ここは、(51)の右にツギ、力をためるところであった。
13. 黒(56)では、(54)の左にノビて、白の形を崩したい。
14. 黒(60)では(56)の左にサガリで受けるべきである。(61)のアテを食っては辛い。



15. 黒（70）は一路右にトブのが形である。
16. 黒（78）では（91）のところにアテを打つべきであった。
17. 白（83）と出られては黒の形が崩れた。
18. 黒（86）は一路左に打つのが本手である。
19. 黒（98）はこの一手である。
20. 黒（100）は悪手、ここはツケコシを狙うところである。
21. 黒（102）は大悪手であった。この手では一路上にツケル手があった。そう打ったら白はどうさばくのだろうかと観戦者は心配していたが、その場合、白はツケタ手の上にオサエておいて大したことがないという判断であった。なるほど、黒からアテを利かしておいて(102)の右上に切る手はあるが、黒が(93)の下を切る手がないので、白は右辺にワタリを打つことができ、大した事件にはならないようである。



- 2 1. 黒 (108) (110) の二段バネ、(114) のノゾキは黒として精一杯の抵抗である。
- 2 2. 黒 (116) のコスミでは、一路下にサガリが勝った。
- 2 3. 白 (117) (119) は厚い本手である。
- 2 4. 白 (127) も本手である。
- 2 5. 白の局後の感想としては、黒(132)で(131)の右に割り込む手があるので、そう打たれると白が困るところであったという。したがって、白は(129)で(130)のところ自重すべきであったことになる。黒(132)は大悪手であり、ここで黒は重大なチャンスを逃したようである。
- 2 5. 黒 (134) では、白 (135) のところに先にノゾキを打ちたかった。白に (135) と打たれては黒の生死が心配である。
- 2 6. 黒 (136) では、白 (137) のところに一手打ち、生きを確かにすべきだった。
- 2 7. 黒 (142) の手で白 (143) のところに打てば生きがあったはずである。